

地芝居の曾我狂言

安田 徳子

地方で素人が演じる地芝居は、多くは大歌舞伎で演じられている演目を、振付師と呼ばれる師匠の指導で演じる。しかし、現在の大歌舞伎ではほとんどあるいは全く見られない演目も多い。そこには大歌舞伎とは異なる地方の嗜好と振付師の足跡が強く反映している。地芝居団体は、専業の振付師を依頼することが多いが、時には村の古老がこれに当たることもある。専業の振付師には、旅芝居が盛んであった頃の旅役者の流れを汲む人が多い。また、今は村の古老が指導に当たっていても、その地芝居の過去を遡れば、やはり旅芝居との関わりを見出すことが多い。したがって、地芝居の演目を調査

することは、大歌舞伎と旅芝居及び地芝居、あるいは中央と地方の演劇文化との相違や交流の跡を明らかにすることにもなると思う。

曾我狂言は曾我兄弟の仇討ちを語る『曾我物語』を脚色した作品だが、江戸歌舞伎では毎年の初春狂言に三座揃って曾我狂言を仕組

む習慣であった。明治以降はこの習慣は消滅したが、曾我兄弟の仇討ち事件は史劇として、伝統的演目として、現代まで代表的な大歌舞伎の演目であった。地芝居でも曾我狂言には、人気の演目として各地で上演されているものがあるので、本稿ではこれを取り上げて検討し、大歌舞伎との相違、地芝居の狂言の特徴を探り出してみたいと思う。

(一)

まず、歌舞伎の曾我狂言について概観しておく。明暦元年(一六五五)八月の江戸山村座「曾我十番切」が曾我狂言の嚆矢と伝えられるが、『松平大和守日記』²⁾には、浄瑠璃の間狂言として「追善曾我」(万治四年三月、寛文二年五月、同八月、同七年五月、同九年四月、延宝二年五月)、「小袖曾我」(万治四年四月、寛文二年九月、

同二〇月、同八年(二月)、「切兼曾我」(寛文二年六月、同七年五月)などの上演が記録されている。いずれも能や幸若にもある曲で、それらから歌舞伎化された演目だったのである。『歌舞伎年表』の寛文五年(一六六五)正月に、

森田座にて「曾我」の三番続の狂言、作者河原崎権之助にて、序幕箱根権現登山の場、一万福太郎後に勘弥、箱王又七二男なり、次の幕箱王元服親子別れの憂場見物袖をぬらし、大詰仇討大評判。

とあって、江戸歌舞伎では続狂言が仕組まれるようになる。元禄一〇年(一六九七)五月五日より中村座で上演された「兵根元曾我」^③は現在内容が確認できるもっとも古い曾我狂言である。後の歌舞伎十八番の一つ「不動」の原拠となった場面もあったが、柔の十郎・剛の五郎、忠臣鬼王・団三郎兄弟といった基本的人物像がすでに見られる。この頃からその後の曾我狂言の形が出来上がって行ったのであろう。江戸歌舞伎で初春に曾我狂言を仕組む習慣は元禄末年頃から始まったらしい。そして、『歌舞伎年表』によれば、宝永六年(一七〇九)正月、中村座を除く江戸三座が揃って曾我狂言を出して以降、定例化したという。関東で盛んだった御霊信仰と結びついて正月の予祝の心を表現するもので、毎年どの劇場も必ず新作を仕組んだ。正徳五年(一七二五)の中村座の初春狂言が「坂東一寿曾我」の

外題で上演されて以後、外題に「曾我」の二字を入れる習慣も出来上がった。

一方、上方の曾我狂言は、『歌舞伎年表』によれば、大坂角の芝居(岩井半四郎座本)で元禄四年(一六九一)に上演された「曾我投島田」が古い。しかし、歌舞伎ではないが、その後の曾我狂言の源流とも言うべき近松門左衛門作の「世継曾我」^④が、貞享元年(一六八四)七月以前に上演されている。元禄一〇年の京都都万太夫座盆興行に上演された近松作の「大名なぐさみ曾我」はこれを歌舞伎に改作したものである。その二年前元禄八年七月には京都早雲座で、やはり坂田藤十郎を中心に「曾我太夫染」が上演されていた。上方では、元禄頃から盆興行に曾我狂言がしばしば仕組まれるようになったのである。「近年京大坂の芝居二の替りけいせい事、盆替り曾我とさだまるやうになりしは、此人の仕初められし事」(元禄一二年『口三味線返答役者舌鼓』坂田藤十郎条^⑤)とある。十郎と大磯の虎、五郎と化粧坂の少将との恋が描かれたが、盆狂言として上演したのは曾我兄弟の御魂祭りの意が込められていたからである。また、近松は生涯に一曲の曾我物の浄瑠璃を書いており、『曾我物語』に対する関心は非常に高かったことが窺われる。近松と藤十郎の二人が、上方の曾我狂言の形成には大きな役割を果たしたと言える。

しかし曾我狂言は、何と言っても江戸の初春狂言が中心であった。

毎年仕組まれる曾我狂言は新春の儀礼であり、多分に制約があった。まず、初春の一番目は時代物として仕組まれ、大詰は必ず曾我兄弟が敵工藤祐経と対面する場(「対面」)だった。正月に血なまぐさい敵討の場は似合わないとして、兄弟が敵の顔を知るといふ敵討ちの予祝で終わる。二月初午の頃に二番目の世話物を出し、廓(吉原)が舞台となるが多かった。曾我とは無関係な世界を「実は」の手法で曾我と結びつけたのである。好評なら、三番目・四番目を出し、

五月には敵討の場を出して五月二八日の曾我祭まで続けた。この中にはさらに、髮梳や勘当場・草摺引・貧家といった類型的局面が毎回繰り返して仕組まれた。これらの原拠は『曾我物語』の中にあるものが多いが、近世的に大きく変型していた。中には原拠の辿れない局面もあった。多くの制約の中で毎年新たな曾我狂言が仕組まれてきたので、類型が重なることや陳腐さを嫌って新奇を求め、社会の変化に対応する敏感さも反映して、多彩な曾我狂言が生まれた。

明治期には、初春狂言の制約や荒唐無稽な展開を排除して、「実伝」という概念で史劇として仕組まれるようになったが、大勢は江戸時代の曾我狂言世界から大きく変わるものではなかった。明治七年三月の東京山村座で河竹黙阿弥作の「蝶千鳥曾我実伝」が初演され、これに夜討の場を加えて明治一四年六月「夜討曾我狩場曙」が上演された。大阪でも明治一二年三月「蝶千鳥曾我実録」が戎座で

上演された。これらは明治から昭和初期までは繰り返して上演されたが、現在はほとんど行われていない。むしろ、一幕物という形で「寿曾我对面」や「矢の根」「外郎売」、二番目物の「助六所縁江戸桜」などが上演されて、江戸歌舞伎の初春狂言の面影を伝えている。

(二)

さて、地芝居は元禄末頃から始まり現代まで続いているが、江戸時代の資料は非常に少ないので、詳細な実態はなかなか把握しにくい。しかし、現在までに収集した日記や記録類の中に記された上演記録、地芝居の台本類などによって、曾我狂言の上演記録を辿ってみると、江戸時代の記録の中にはほとんど見出せない。一方、明治以降の記録や現行の地芝居においては曾我狂言の上演はかなり多い。記録量に多寡があるので、確かなことは言い難いが、地芝居においては曾我狂言は明治以降の演目だったと見られる。

地芝居の曾我狂言の中でもっとも上演が多いのは「対面」である。これは明治以降の上演記録や台本類にはほとんど全てに含まれており、現在活動する地芝居団体のほとんど全てが上演演目として持っている。次いで多いのが、幼い曾我兄弟が斬首の危機から危うく逃れた経緯を描く「由比ヶ浜」。これは美濃・三河・遠江を中心に、

埼玉県の秩父歌舞伎や山形県の山五十川歌舞伎などで現在も演じられている。近年では上演回数が少なくなっているが「揚巻助六」「曾我中村」も、美濃・三河・遠江を中心にこれ以西の地芝居には台本が数多く残っており、人気の演目であったことが窺われる。現在ほとんど上演されていないが上演記録や台本が残っている演目としては、兄弟の夜討を描いた「夜討曾我」や「十二時曾我討入」、あるいは五郎の最期を描く「頼朝時致問答」「敷皮の五郎」などがあり、これらもかつては地芝居の上演演目だったと思われる。これらの演目は、「対面」以外は現在の大芝居では演じられないものばかりである。

(三)

地芝居の上演演目について、もう少し検討する。

まず「対面」であるが、前述した如く、江戸歌舞伎では初春狂言の必須の一場であったが、現在の大歌舞伎では独立した演目「寿曾我の対面」として演じられている。地芝居の「対面」もほとんどこの「寿曾我の対面」である。地芝居でも同外題で上演している所が多いが、「吉例蝶千鳥 曾我の対面」「新城歌舞伎」、「会稽曾我曙 富士の裾野 工藤祐経の館」(美濃歌舞伎)、「曾我物語対面場」(肥土山歌舞伎台本)など多少異なるものもある。また、東濃歌舞伎中

津川保存会など、中村津多七・中村高女が振付指導をする演出では鬼王新左衛門の登場する件がない。また、並び大名を出さないとか、曾我兄弟の盃は虎と少将ではなく近江と八幡が酒を注ぐなど、独自の演出を持つ所も多い。松本団升の流れを汲む振付では「会稽扇曾我 鶴ヶ岡八幡対面の場」の外題で、場所を鶴ヶ岡八幡社前とし、舞踊風に演出した演目があるなど、地芝居独自の改作もある。地芝居では上演の演者の構成や舞台の規模によって、それぞれの地域にあった演出が工夫されたが、大歌舞伎でも襲名興行などで上演されることが多いように、祝言性が強いこの演目は、祭の奉納芸として演じられることが多い地芝居には似つかわしいものであった。加えて、大時代で登場人物も多彩だが纏まりがよい一幕はキラを求める地芝居の要請にかなっていたのである。曾我兄弟の若さを強調して、子供歌舞伎として演じられる場合が多いのも地芝居の特徴であろう。

(四)

次に、現行の大歌舞伎ではほとんど上演されない演目について検討する。

前項で述べた如く、東濃三遠南信地域を中心に「由比ヶ浜」と呼ばれる演目が行われている。河津の三郎祐泰の遺子一万・箱王は、

工藤の勧めで後の憂いを絶つことを考えた頼朝の命で捕らえられ、由比ヶ浜の敷皮の上に引き出されて、番場の忠太によって斬首されようとする。どうせ斬首になるならば親の手で、と養父曾我祐信は申し出るが、どうしても斬ることはできない。その時、諫言を聞き入れた頼朝の赦免状を持って重忠が刑場に駆けつけ、兄弟は救われる。その後は対面の趣向となり、後日の仇討ちを約す。この筋立て、「三国一曾我の礎 由比ヶ浜」(鳳凰座歌舞伎)、「児模様曾我館染 由比ヶ浜の場」(白雲座歌舞伎・湖西歌舞伎)、「稚児揃曾我の敷皮 由比ヶ浜」(小原歌舞伎)、「蝶千鳥曾我の物語 由比ヶ浜の場」(新城歌舞伎)、「蝶千鳥曾我実伝 由比ヶ浜の場」(山五十川歌舞伎・下条歌舞伎)、「蝶千鳥曾我之生立 由比ヶ浜の場」(横尾歌舞伎)、「富士御狩曾我物語 由比ヶ浜」(三郷歌舞伎)、「由比ヶ浜 曾我兄弟仕置の場」(串原歌舞伎)、「富士三升孝子誉 由比ヶ浜」(蛭川・常盤座・東座・秩父歌舞伎)など、様々な外題で上演されている。また、恵那市東野の伊藤家台本では「寿曾我生立 由比ヶ浜場」、中津川市の市川源童旧蔵台本では「曾我物語 由比ヶ浜」の外題となっている。

この演目については以前別稿でも触れたように、恵那市山岡町の松本団所蔵台本目録には「三国一曾我の礎 由比ヶ浜の場」の外題で「地芝居のみ保存伝承している芸題」に分類され、作者は「嵐

鱗花」と注記されているが、これは慶応二年(一八六六)二月一二日より江戸守田座で初演された「富士三升扇曾我」の四幕目大詰「由比ヶ浜の場」を独立させたもので、「曾我の敷皮」「敷皮曾我」「生立曾我」と通称され、作者は番付に狂言堂左交(三世桜田治助)・四世桜田治助、スケ二世河竹新七(河竹黙阿弥)らとある。序幕の鎌倉鶴ヶ岡の場、同小袋坂の場で、工藤祐経舎弟祐兼が六浦主水が頼朝に献上すべき赤木の短刀を盗んで、主水に罪を着せて追放するが、それを団三郎に見抜かれ、加えて神前試合に不覚をとった遺恨もあって、曾我の一万箱王兄弟を双葉の中に刈り取らねば後日の遺恨と頼朝に讒言する。二幕目は祐信屋敷の場、満江部屋の場で、中村の曾我の貧家に梶原景季が頼朝の使者として曾我兄弟を捕らえに来る。覚悟した母満江は兄弟の髪を結び上げ、養父祐信・鬼王と別れの盃をかわして、兄弟は引かれて行く。三幕目は鎌倉宮中の場で、頼朝が曾我兄弟死罪の命を下したことを諫められてもなかなか聞き入れないが、畠山重忠の諫言でようやく聞き入れる。その後の四幕目が由比ヶ浜の場。この「富士三升扇曾我」は、『演劇百科大事典』(本田安治担当)に指摘するように、『曾我物語』^⑩巻三及び幸若「切兼曾我」、番外謡曲「切兼曾我」、さらには近松門左衛門作「本領曾我」第四の切「由比ヶ浜」を典拠とし、これに鬼王と団三郎兄弟の件を加え、髪上げや盃事など歌舞伎的局面を加えて仕組まれたものであ

る。明治七年（一八七四）三月東京村山座の「蝶千鳥曾我実伝」、明治一二年三月大阪戎座の「蝶千鳥曾我実録」など、その後の曾我狂言にも「由比ヶ浜の場」は組み込まれた。多様な外題は、例えば「児模様曾我館染」は明治一一年一月の新富座の時のものというように、その後の上演時の外題に拠っているのである。

「由比ヶ浜の場」は原拠の『曾我物語』をよく反映しており、明治期の史劇という概念によく合致し、明治・大正期には大芝居でも繰り返し上演され、小芝居や旅芝居でも人気演目となり、そこから地芝居に入ったと考えられる。下条歌舞伎には「蝶千鳥曾我実伝」の「頼朝御殿 重忠諫言ノ場」と「由比ヶ浜の場」の両方の台本が伝わっている。また、新城の中村竹昇所蔵台本（市川市団次旧蔵）には「富士三升扇曾我」の「三段／四段 門外より満江別れまで」が所有されている。「由比ヶ浜」のみでなく、その前の部分もかつては演じられていたらしい。前述した団升台本目録の「嵐鱗花」を作者とする記述も考え合わせると、原作の「富士三升扇曾我」の「由比ヶ浜の場」に嵐鱗花が改作を施して、上演したこともあったかも知れない。しかし、江戸歌舞伎の伝統の曾我狂言とは少し異なった史劇的要素は、伝統を重んじる大歌舞伎では次第に疎まれていったのであろう。一方で、子供を介しての親子の絆を描く演目は地芝居では人気で、死へ追い詰められた幼い曾我兄弟の健気さと養父の切

ない真情が観客の身に迫って同情を誘う「由比ヶ浜」は、各地の地芝居に現在まで残ったのである。

（五）

「曾我中村」、通称「貧乏曾我」とも称される演目も現行の大歌舞伎では演じられない。地芝居でも近年上演回数が減っているが、「蝶千鳥曾我中村 兄弟出立の場（敵討出立の場）」あるいは「扇曾我 中村の場」の外題で東濃・三河地域の地芝居で上演されてきた。この地域の他、小豆島肥土山歌舞伎にも台本が残っているので、東濃・三河以外の地域でも行われていたらしい。中津川の後藤源童旧蔵台本では「富士三升孝子誉 蝶千鳥曾我中村」、春日井の大内氏蔵の台本では「蝶千鳥曾我生立 中村之場」の外題が附けられている。梗概を記すと、十郎と五郎の兄弟は敵討ちの決意を固め、曾我の里に母満江を訪ねる。そこへ末の弟禅師坊が越前から兄達に敵討ちを促すために尋ねて来る。十郎は自分はこの家の家臣と偽り、曾我兄弟も行方しれず母も死んだと言って追い返す。兄弟は母に五郎の勘当を解いて欲しいと願うが、許されないゆえ五郎が死のうとするので、母は本心を見抜いて勘当を許す。禅師坊も現れ、兄たちの決意を聞いて、足手纏いとならぬよう自害する。母は兄弟に用意した蝶と千鳥の狩衣を与えて送り出す、というもの。¹¹⁾

『曾我物語』巻七には、曾我兄弟が仇討ちを決意して、曾我中村の母に別れを告げに来て、母は五郎の勘当を許し、貧しい中で用意した小袖を与え、盃を交わし、舞を舞い、歌を詠んで最期の別れを惜しむ件がある。これを踏まえた謡曲「小袖曾我」（但し、兄弟に小袖を与える部分はない）、幸若「小袖曾我」、近松門左衛門作「曾我扇八景」（正徳元年へ一七一〇正月二二日以前竹本座初演）があり、これらの影響下に成立した演目かと思われる。しかし、『曾我物語』でも幸若舞曲「小袖曾我」、「曾我扇八景」でも兄弟に与えた小袖は蝶と千鳥の紋様ではない。但し、『曾我物語』巻八で夜討ちの時の兄弟の装束を描く部分に、「十郎が其の日の装束には、萌黄にほひの裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、……。五郎が其の日の装束には、薄紅にて裏打つたる平紋の竹笠、まぶかにきて、唐貫布に、蝶を三つ二つ所々に付けたる直垂に、……。とあり、近松の「曾我扇八景」では、これを踏まえて兄弟の夜討ちへの道行の場で「是よりそがへ追かやさばかた見も文も母上の。御手に早くわたるべし。げに御ことはり同じくはこね二の宮へも。髓にとゞき大磯の。磯に音をなく村千鳥。見らるゝも夢。見る人も夢のあげはのてふ千どり。ひたゝれといて。かたにかけ兄弟鬻に手をかけて。」と語られ、兄弟が夜討ちには蝶と千鳥の直垂を着て行ったことが知られる。『曾我物語』によれば、母から与えられた小袖は無事返す様に言い含め

た言葉に母の思いを込めたものであったのだが、『曾我物語』が歌舞伎に取り込まれ、蝶・千鳥の紋様が兄弟を象徴するものとなり、近世的武士道に彩られた敵討ちでは、門出に際して母が贈る晴の衣裳が蝶・千鳥の小袖という話が出来上がったのであろう。

しかし、渥美清太郎氏が日本戯曲全集第十四巻の『曾我狂言合併集』（一九一九・七 春陽堂）の「初冠曾我臯月富士根」解説で、「春芝居の曾我狂言は、終局が対面で、それ以上は決して進まなかった。即ち小袖曾我とか夜討曾我とかは、春狂言には断じてみられなかった。それは時として五月狂言にのみ演じられたのであった。爰へ出したのは即ち小袖曾我と夜討曾我の見本で、文政八年五月、中村座に上演されたもの。作者は大南北である。黙阿弥の「夜討曾我狩場曙」が出るまでは、討入と云へばこの狂言にきまつてゐたもので、随分数多く上演されてゐる。」と述べておられるように、母が兄弟に小袖を与える場は江戸歌舞伎ではあまり演じられていない。「初冠曾我臯月富士根」はその数少ない作品で、序幕ではまさに母から兄弟に蝶・千鳥の衣裳を与えられる件があるが、それまでの経緯が地芝居の「曾我中村」とは大きく異なっている。また、渥美清太郎も揚げている「夜討曾我狩場曙」の中村の場や福地桜痴作「十二時會稽曾我」（明治二六年五月初演）の曾我中村満江閑居の場もあるが、小袖を与える件はない。地芝居の「曾我中村」の原作という

べきものが見つかからない。

ところで、中村竹昇所蔵台本に「敷皮 十八番物 孝道無比 頼朝 御殿十ヶ条問答」、伊東家所蔵台本には「蝶千鳥曾我敷皮 御領の 狩屋時致問答の場」、肥土山歌舞伎所蔵台本には「富士三升曾我実録 頼朝五郎もんどふの段」というものがある。本懐を遂げた後に捕らえられた五郎が敷皮の上に据えられ、頼朝と対峙する件が描かれていて、「夜討曾我狩場曙」の五幕目大詰に拠っていると思われるが、「敷皮の五郎」などと呼ばれて旅芝居で演じられていたものである。猶、肥土山歌舞伎には「富士三升曾我実録」の外題で、「出立ノ場」と「敵討より頼朝モンドウまで」の浄瑠璃本がある。

また、松本団升所蔵台本の目録に「会稽曾我礎 曾我の中村兄弟出立・時致問答の場」とあり、作者は「近松門左衛門 天和三年」としている。「出立の場」は「曾我中村」で、「時致問答の場」は「敷皮の五郎」のようである。これからすると、「天和三年」は「宝永三年」の誤りで、近松門左衛門の「曾我扇八景」が典拠ということだろう。また、「蝶千鳥曾我敷革」は明治四四年（一九一一）一月に名古屋朝日座で名古屋在の役者、尾上幸十郎や中山喜楽によって上演されたものと同外題である。こうした台本や浄瑠璃本の存在を考慮すると、この二つの場は「曾我扇八景」の影響を受けて書かれた「富士三升扇曾我」や「夜討曾我狩場曙」などを元に名古屋辺で改

作が施され、旅芝居によって広まったものかもしれない。

（一八）

もう一つ、地芝居の曾我狂言に大歌舞伎には全く見られない演目がある。内容は、前半が「助六」、後半は「対面」の筋を用い、助六実は曾我五郎、揚巻実は曾我十郎、髭の意久実は工藤祐経、意久下男幾助実は大藤内成影という設定で、両作品を結び付けたもの。やはり、美濃・三河地方を中心に上演されている。内容については安田文吉によって検討が加えられている^①ので、詳細はそちらに譲る。この演目の外題は「揚巻助六」とするところが多いが、松本団升所蔵台本では「曾我の夜桜 仲之町対面」となっている。大歌舞伎で人気の曾我狂言「助六」と「対面」を緋い交ぜにして見せるという奇抜な発想で、観客の意表を突くもので、容易に大歌舞伎を見られない地方の観客には人気の二演目が一度に見られるという贅沢な演目でもあり、いかにも旅芝居の発想と言えよう。昭和二〇年代の京都・博多などの小芝居で上演されており^②、播州歌舞伎・伊能歌舞伎の上演演目にも見えるので、旅芝居ではかなり広範囲に演じられ、地芝居に入ったものようである。作者は嵐鱗花作と言われている。前述の「由比ヶ浜」にも鱗花の関わりが窺われたが、鱗花は江戸末期から明治にかけて、三河刈谷を根拠地に、名古屋の小屋や旅芝居

で一座を率いて活躍した役者で、自作の演目を持って興行することが特徴だったという⁽¹³⁾。現在、鱗花の足跡がたどれる資料はほとんどない。しかし、鱗花の作品は弟子達によって美濃・三河地方の地芝居に伝えられたとも言われている。「揚巻助六」がそうした演目の一つだった可能性は高い。猶、中村竹昇所蔵台本の外題は「曾我十二時 揚巻助六」であるが、「曾我十二時」の由来は不明。

(七)

地芝居で上演されている曾我狂言について検討してきた。「対面」以外は、現在の歌舞伎では上演されない演目ばかりであること、明治以前の地芝居では曾我狂言はほとんど上演されていなかったことなど、大芝居とは異質な地芝居の在り方が知られる。

「由比ヶ浜」は黙阿弥の「富士三升扇曾我」の大詰だが、「曾我中村」は典拠を見出せない。しかし、いずれも原拠の『曾我物語』に語られた逸話から近松門左衛門が仕組んだ浄瑠璃を経て歌舞伎化されたもので、江戸歌舞伎で初春狂言として毎年仕組まれて原典から大きく変型していったものではなく、明治以降の史劇として位置づけられて原典に近い内容で脚色されたものである。地芝居は江戸歌舞伎よりも、明治から昭和初期の歌舞伎を継承している一面があると言えるのかもしれない。また、両演目ともに、死の危機に瀕し

た親子・兄弟の情愛、家族の絆を強調したものである。地芝居は辺境の地にあつて、過去の英雄に出会い、武家や公家といった庶民とは別世界を垣間見る機会でもあり、それが魅力でもあったから、時代物が好んで取り上げられたのだが、全く別世界では心に響きにくい。その点、親子・兄弟の情愛、家族の絆は、時代を超えて身分を越えて思いを共有することができる。そこに、地芝居が家族劇を好んだ理由がある。この二演目もこうした地芝居の特質をよく示している。

また、「由比ヶ浜」「曾我中村」「揚巻助六」のいずれも東濃・三河地域の地芝居を中心に上演されている演目で、古くは旅芝居で演じられてきたものであった。旅芝居役者が地芝居の振付師として地芝居を指導した在り方をよく反映しているが、これらは嵐鱗花との関わりを窺わせる伝承があり、東濃や三河の地芝居には当地だけの演目といった伝承があるなど、名古屋周辺を発信地とする演目のように思われる。これは旅芝居の一つの拠点が名古屋辺であったということを示していよう。旅芝居が消滅してしまった今、明治から昭和前半まで非常に盛んで、演劇文化の一端を担っていた旅芝居の実態は、地芝居でしか窺い知ることができなくなっている。そういう意味でも、地芝居だけの上演演目や演出は貴重である。

- (1) 『演劇百科大事典』の「曾我物」の項(渥美清太郎)、『歌舞伎事典』の「曾我物」の項(戸板康二)などに整理して述べられている。
- (2) 『庶民文化史料集成』第二二卷(一九七七・一〇 三二書房)所収本による。
- (3) 『元禄歌舞伎傑作集 上』(一九二四・一二 早稲田大学出版部)所収狂言本による。
- (4) 近松門左衛門作品は全て『近松全集』(岩波書店)による。
- (5) 『歌舞伎評判記集成』第I期第二卷(一九七三・二 岩波書店)による。
- (6) 地芝居の上演演目資料は、江戸期の日記・古文書、各地の県史・郡史・市町村史等から拾うことのできる記録、各地芝居団体が調査公表している上演記録、公演チラシ、伝存台本等、上演演目を知りうる資料をできるだけ広範囲に収集し、現在、上演記録は中部地区を中心に四五団体(箇所)分約二五〇〇例、伝存台本及び台本目録は一五箇所分約二二〇〇点を把握している。
- (7) 『中津川の芝居』(国立劇場第一〇三回民俗芸能公演筋書 二〇〇六・三)などに指摘がある。
- (8) 拙稿「地芝居の演目―美濃・三河地域の場合―」(『岐阜聖徳

- (9) 河竹繁俊校訂編集『黙阿弥全集』第五集(一九三三・一一 春陽堂)による。黙阿弥作品は全てこれによる。猶、「富士三升扇曾我」は初演番付では「富治三升扇曾我」とある。
- (10) 日本古典文学大系(岩波書店)所収本による。
春日井市大内氏蔵『蝶千鳥曾我生立 中村之場』に拠って示した。この台本の裏表紙に「昭和四年十二月十九日／三濃村野原／中村寿笑」とあり、万人講系の台本である。
- (11) 安田文吉「三河の地芝居『曾我十二時 揚巻助六』の場合」(ふるさと文化学研グループ編『三州山吉田史』平成15年4月)
- (12) 金関丈夫「博多三勇士」(『九州文学』一九五三・一一)。
- (13) 木村錦花「万人講の鱗花芝居」(『興行師の世界』一九五七・四 青蛙房)及び同「旅芝居今と昔 鱗花芝居のことなど」(『演芸画報』一九三四・三)